

『異父兄弟』を中心に

中村（小松原）みどり

ギヤスケル夫人は、キリスト教的人間愛と同情心から、読者の心を揺さぶらずにはおかない数々の小説を執筆した。それらの中で最も広く読まれている作品は、物質文明隆盛の産業社会を背景に、労資の相互理解と協調を訴えた『メアリ・パートン』(1848)と『北と南』(1854)、伝統的価値体系に支えられた田舎の平和な生活を愛情を込めて描いた『クランフォード』(1851)であり、ギヤスケル夫人の評価も、これらを始めとする長編小説を中心に行われている。一方、短編小説は長編小説の陰に隠れて閑却されてきたが、短編小説には長編小説のモチーフが凝縮されている。このような視点から、短編小説『異父兄弟』を再評価し、ギヤスケル夫人像を探ってみた。

『異父兄弟』は1858年に*Dublin University Magazine*に掲載され、1859年に*Round the Sofa*に収録された作品である。*Round the Sofa*は、既に定期刊行物に掲載された6つの作品*My Lady Ludlow*(1858)、*An Accused Race*(1855)、*The Doom of Griffiths*(1858)、*Half a Lifetime Ago*(1855)、*The Poor Clare*(1856)、*The Half Brothers*(1858)を一つの枠組の中に巧みに織り込んだ枠物語で、『カンタベリー物語』や『千夜一夜物語』と同じ形式にまとめられている。ギヤスケル夫人は、*Round the Sofa*出版以前に、同時代の小説家チャールズ・ディケンズがこの形式でまとめた*A Round of Stories by the Christmas Fire*(1852)、*Another Round of Stories by the Christmas Fire*(1853)、*A House to Let*(1858)に、計4編の短編*The Old Nurse's Story*(1852)、*The Scholar's Story*(1853)、*The Squire's Story*(1853)、*Manchester Marriage*(1858)を寄稿しており、ディケンズから学ぶ点があったかもしれない。

まずはじめに『異父兄弟』の粗筋を振り返っておきたい。語り手「私」の母ヘレン(Helen)は17才で結婚するが、二人めの子供グレゴリー(Gregory)を妊娠中に20才の若さで未亡人となり、さらに出産の2週間前に娘をなくす。

ヘレンは姉ファニー (Fanny) と共に裁縫をして生計を立てるが、視力が落ちて細かい裁縫ができなくなり、生活が逼迫する。そこへウィリアム・プレストン (William Preston) が求婚し、ヘレンは再婚する。この結婚生活はうまくゆかず、ヘレンは夫のかんしゃくが原因で早産し、語り手「私」を残して他界する。ウィリアムは結婚生活の失敗を全て連れ子のグレゴリーのせいにしてグレゴリーを憎み、実子である語り手「私」だけを溺愛する。しかし、遭難した語り手「私」を、グレゴリーが命を捨てて救うという事件を契機に、ウィリアムは自らのそれまでのあり方を悔い改める。

粗筋だけを述べると、ヘレンの受難ばかりが目立つが、実際は物語の3分の2がヘレンの死後の出来事である。

まず、ヘレンにこれほど多くの不幸が背負わされている訳を考えてみたい。それは一つには母親の愛情を強調するためであり、もう一つにはヘレンの再婚が理にかなった行動であることを説明するためである。

ギャスケル夫人は母親ならではの目で、母子の絆をとらえている。

ヘレンは夫を亡くして間もなく、幼い娘にも先立たれ悄然となるが、この時の悲嘆の様子は、ヘレンにとって幼い娘がいかに大切な存在であったかを示している。

Aunt Fanny would have been thankful if she [i. e. my mother] had [cried]; but she sat holding the poor wee lassie's hand, and looking in her pretty, pale dead face, without so much as shedding a tear. And it was all the same, when they had to take her away to be buried. She just kissed the child, and sat her down in the window-seat to watch the little black train of people (neighbours——my aunt, and one far-off cousin, who were all the friends they could muster) go winding away amongst the snow, which had fallen thinly over the country the night before. (pp.335-336, *My Lady Ludlow and Other Stories*, The World's Classics, Oxford U. P.)

ファニーおばさんは母が泣いてくれたら有り難く思ったでしょう。でも母はかわいそうな小さな少女の手を取って、一滴の涙さえこぼさずに、そのきれいな青白い死に顔を覗き込んで座っていました。そして、人々が少女を埋葬しに運んでいかねばならないときも、全くそのままでした。母はただ子供にキスをして、窓椅子に腰をおろし、黒衣をまとった人達の小さな列が(近所の人達——伯母、遠くに住む親戚が一人、それが夫婦が集めることができた全てでしたが)、前の晩にこの地方にうつつらと積もった雪の中を、曲がり

くねりながら遠ざかってゆくのをじっと見ていました。

この幼女はしょう紅熱で亡くなったと述べられているが、ギヤスケル夫人も最愛の息子をしょう紅熱で亡くしており、ここにはギヤスケル夫人自身の母親としての辛い経験の余韻が感じられる。

そしてヘレンにこの危機を乗り越えさせるのもまた母親の愛情である。グレゴリーの誕生によってヘレンは再び生きる力を与えられるのである。娘の死で茫然となっていたヘレンはグレゴリーが生まれると我に返ってとめどなく涙を流し、心配する人達に「私が流す全ての涙の滴は、泣く力がなかったために以前はひどい状態にあった私の頭を楽にしてくれるのだから、心配し過ぎないように」*'not be over-anxious, for every drop she shed eased her brain, which had been in a terrible state before for want of power to cry'* (p.336)と説明する。グレゴリーは母ヘレンの安らぎであり、生きる力なのである。そしてグレゴリーに対する母の愛は、「彼女はそれ以後、自分の新たに生まれた小さな赤ん坊のこと以外何も考えないようでした」*'She seemed after that to think nothing but her new little baby'* (p.336)とある様に、いやが上にも強力なものとなる。

つまり、愛する夫と娘の死という二つの悲劇を重ねることによって、ヘレンのグレゴリーに対する愛情が普通以上のものであることが説明されるのである。

一方、ヘレンの視力が落ちて裁縫で生計を立てることができなくなることは、ヘレンが愛なき結婚に踏み切ることに正当性を与えている。ヘレンは、夫と娘の死という心の傷も癒えぬうちに、生活のために結婚する。

ヘレンの2度目の結婚が愛情とは無関係の就職であったことは、繰り返し示唆されている。ヘレンはウィリアム・プレストンに求婚されて帰宅すると、胸も張り裂けんばかりに泣くが、これは愛が実った感涙ではなく、母子の今後の生活保証ができた安堵の涙である。ヘレンはファニーにこう言う。

William Preston had asked her [i. e. Helen] to marry him, and had promised to take good charge of her boy, and to let him want for nothing, neither in the way of keep nor of education, and that she had consented. (pp.337-338)

ウィリアム・プレストンが私に求婚し、しっかり私の息子の面倒を見て、生活の面でも教育の面でも息子には何不自由させないと約束したので、私は承

諾しました。

しかし、食べ物も満足にない困窮状態が示されているので、ヘレンの再婚は分別ある行動に違いない。ヘレンの視力低下は2度目の結婚生活がどうなるうとも、誰もヘレンの選択を責められない状況を作っているのである。

このようにしてヘレンの心理や行動が必然的なものであることが説明され、これを前提に、就職としての結婚がいかなるものかが描かれる。

ヘレンにとって最初の結婚生活が過去のものとなっていないことは、語り手「私」によって次のように示唆されている。

I think aunt Fanny may have been mistaken in believing that my mother never thought of her husband and child just because she never spoke about them.(p.336)

ファニーおばさんが、母が夫と子供のことを決して口にしないというだけで、母は夫や子供のことを全然考えないのだと信じたのは間違っていたかもしれない、と私は思います。

ヘレンの再婚は子供のための自己犠牲である。ヘレンは結婚が決まると塞ぎ込んでしまい、それまでも増してグレゴリーを愛するようになる。ヘレンは現実を拒むかのように、グレゴリーへの愛情に逃げ込んで、心を閉ざし、これが後の悲劇の原因となるのである。

ここには寡婦のおかれた厳しい現実がある。ギヤスケル夫人が小説を通して社会批判をしたことは周知の事実であるが、ここでも悲劇の原因は、ヘレン個人の選択を越えた社会に求められており、問題提起が行われている。

次に、結婚生活を舞台にヴィクトリア朝を代表する「男らしさ」「女らしさ」の伝説が批判される。19世紀は職場と家庭とが分離した結果、男女の役割が分極化し、男女のステレオタイプが完成した時代である。子供が遭難するまでのウィリアムは正に「男らしさ」のステレオタイプである。競争的で、自己主張が強く、支配的で、厳格で、短気で、「自分の妻は常に自分と同じ考えであるべきだ」'who [i. e. his wife] ought to be always in the same mind that he was' (p.339)と考えている。そんなウィリアムは、妻がグレゴリーだけを愛しており自分を愛していないと気付くと、ヘレンを罵り、グレゴリーを嫌うようになる。そして「もっと自分を愛して欲しい」「子供をもっと愛さないようにして欲しい」と言う。夫として妻から愛されたいというのは当然

の要求であるが、親子の愛情と夫婦の愛情を同列に考えて、妻への愛情を連れ子への憎しみに転嫁したり、子供を愛さないようにしろというのは、子供のわがままと同じである。ここでのウィリアムの姿は、周囲からちやほやされ、甘やかされた幼い語り手「私」が、農場で働いている人達の前で一種の権威を装って横柄な道化の役を演じる姿と重なっている。ギヤスケル夫人の観察力は、父権社会が男性に与えている、権威というヴェールを剥がして、ウィリアムの人間としての未熟さを顕にするのである。語り手が、「もしも父が辛抱強く待ったなら、もしかするとやがて愛が芽生えたかもしれません」‘Perhaps, love would have come in time, if he[i. e. my father] had been patient enough to wait;’ (p.338)と言っている通り、ウィリアムはヘレンの「不平も漏らさぬ忍耐強さ」‘uncomplaining patience’ (p.339)を見習う必要がある、連れ子に対しても親としての愛情を与えるべきだったのである。ウィリアムはヘレンとの約束を守り、金で買えるものをグレゴリーに与え渡すことはなかったが、金を出すことは愛情を与えることとは違う。ヴィクトリア朝では、男性は体力も知力も女性より優れているということになっていたが、男性と言えども女性や子供と同じ人間であり、女性的な価値をも学ぶべきであるとギヤスケル夫人は主張しているのである。

ウィリアムは息子の遭難を契機に「男らしさ」のステレオタイプを脱する。語り手「私」が昏睡から覚めたときのウィリアムの様子は次のように書かれている。

my father's stern old face strove in vain to keep its sternness ; his mouth quivered, his eyes filled slowly with unwonted tears. / 'I would have given him half my land—I would have blessed him as my son,—oh, God! I would have knelt at his feet, and asked him to forgive my hardness of heart. (pp.346-347)

父の厳しい老いた顔は、その厳しさを保とうとしていましたが無駄でした。父の口は震え、父の目はゆっくりと、いつにない涙で一杯になりました。／「あの子に私の土地を半分やったのに——あの子を自分の息子として祝福してやったのに——ああ神様、あの子の足元に跪いて、私の心のつれなさを許してくれるように頼んだのに」

ウィリアムはここで、「男らしさ」という仮面を脱ぎ、「すまなく思うよりも怒る方が好きな人」‘A man who liked better to be angry than sorry’ (p.339)

から、すまなく思い後悔する人間へと成長する。そしてこの物語は次のように締めくくられる。

we found a paper of directions after his[i. e. my father's] death, in which he desired that he might lie at the foot of the grave, in which, by his desire, poor Gregory had been laid with OUR MOTHER. (p.348)

私達は父の死後、一通の指図書きを見つけたのですが、その中で父は、父の希望によって可愛そうなグレゴリーが私達の母と一緒に眠っている墓の足元に葬ってもらえるようにと望んでいました。

ウィリアムは謙遜、協調、思いやりという女性的価値を取り入れて人間的に成長し、ここに和解が成立する。OUR MOTHERの2語が特に大文字で書かれていることは、ヘレンの愛を巡って二つに分裂していた家族が、和解して一つになったことを物語っている。

『異父兄弟』のウィリアムの成長は『メアリ・バートン』に登場する工場主カーソンを思い出させる。『メアリ・バートン』は労資問題を扱った社会小説であるが、ここでもいかめしくて頑固で冷酷な工場主が、息子を殺されるという深い悲しみに会って人間性を回復する。そして相互理解による労資の和解の可能性が探られる。『北と南』では、田園都市ヘルストン出身のマーガレット・ヘイルと工業都市ミルトンの事業主ジョン・ソートンという、互いに異なる背景と価値観をもった二人が出会い、反発し、理解し合い、結ばれる。『異父兄弟』においても、『メアリ・バートン』や『北と南』と同様に、社会的強者に女性的な柔軟さが求められている。「男らしさ」と「女らしさ」、雇用者と労働者、産業社会の競争理論とキリスト教的博愛、といった異なる価値観の融合をギヤスケル夫人は求め続けていたように思われる。『克蘭フォード』に描かれたような、互助精神あふれる平和な生活が常にギヤスケル夫人の念頭にあったのであろう。

次に、グレゴリーの死について考えたい。グレゴリーの死の場面は、グレゴリーの孤独を際立たせ、この物語を単なる教訓物語以上のものにしていく。まず、グレゴリーを取り巻く人間関係を振り返る必要がある。グレゴリーの母ヘレンは、夫と娘を亡くした後、生きる力をグレゴリーへの愛情に求め、ウィリアムの愛情に応えることがなかった。一方、ウィリアムも、血のつながった語り手「私」が生まれると、かつてない愛情を語り手「私」に注ぐ。人間が自己完結した個として、歪まずに生きてゆくことは容易ではない。語

り手「私」が説明しているように、「彼は大抵の人には厳格で厳しい人だったにもかかわらず、何か愛するものを必要としていたのである。」‘he needed something to love, for all that, to most people, he was a stern, hard man’ (p.340) ウィリアムはヘレンに求めて得られなかった孤独な魂の支えを、実子である語り手「私」に見いだし、ヘレンを死なせてしまった自責の念をグレゴリーへの憎しみにすりかえるのである。つまり、この家庭はヘレン＝グレゴリー、ウィリアム＝語り手「私」という2極構造を成している。ウィリアムがグレゴリーを認めず、使用人もアダム老人以外は皆ウィリアムの側になってしまう状況では、グレゴリーの孤独な魂の支えは亡き母より他にない。

この状況を踏まえると、吹雪の中でグレゴリーが弟をかばって死ぬことを、単なる英雄的行為として評するだけでは十分とはいえない。グレゴリーは自分の肩掛けと外套で語り手「私」を包むと、語り手「私」の傍らに横になつてこう言う。

‘Thou canst not remember, lad, how we lay together thus by our dying mother. She put thy small, wee hand in mine—I reckon she sees us now; and belike we shall soon be with her. Anyhow, God’s will be done.’ (p.346)

「ねえ、お前は僕たちが、死にかけているお母さんの傍らでこんなふうに一緒に横になったのを覚えているはずがないね。お母さんはお前の可愛い小さな手を僕の手握らせたんだ——僕は思うよ、お母さんが今僕らを見ていると。そして多分僕らは間もなくお母さんの元に行くだろうと。とにかく、神のみ心の行われんことを。」

そしてグレゴリーは静かに再び母親のことを語り続ける。グレゴリーの死の様子はこう述べられている。

He [i. e. my brother] was in his shirt-sleeves——his arm thrown over me——a quiet smile (he had hardly ever smiled in life) upon his still, cold face. (p.348)

兄はシャツ一枚でした——兄の腕は私に投げかけられていました——静かな微笑みが（兄は生前は殆ど一度も微笑んだことがありませんでしたが）兄の動かぬ冷たい顔に浮かんでいました。

グレゴリーの死は、無償の愛を注いでくれた母の元への旅立ちであり、永遠の安らぎなのである。グレゴリーの孤独がここに凝縮されている。

ウィリアムは愛を求めても満たされない孤独をグレゴリーへの敵意にすり替えた。一方、グレゴリーは孤独にも虐待にもじっと耐え、自分を馬鹿にしていた弟を命を捨てて救う。勿論、グレゴリーの自己犠牲はキリスト教的プロバガンダでもあろう。しかし、孤独な魂が愛を求めて彷徨する姿には、単なる絵解きを越えた力がある。

ここで丘陵の場面の描写に触れておきたい。暗闇が濃くなり雪が降り出すにつれて死の恐怖が強まっていき、その極にラッシーの吠え声が出て希望の光が差し込むあたりは、丘陵地帯の自然を巧みに取り入れて登場人物の気持ちを共鳴させ、物語を劇的に盛り上げている。グレゴリーがラッシーを頼りに帰り道を捜す場面には、臨場感がある。短いスペースの中で、語り手「私」の感情が、余りに大きな振幅で目まぐるしく変化するため、多少メロドラマ的になっていることは否めないが、ここにはギヤスケル夫人のストーリー・テラーとしての腕前が披露されている。そして、丘陵の場面のメロドラマ性は、類稀な観察力と鋭い洞察力に支えられた前半の心理描写が与えるリアリティーによって補われていることも、付け加えておきたい。

最後に、この物語の語りに着目したい。この物語はグレゴリーの弟である語り手「私」によって語られているが、語り手「私」が直接知らないことについては、伯母ファニーから聞いたこととして、ファニーの言葉で語られている。このため、一連の出来事が、ファニーの主観的な視点と語り手「私」の客観的な視点から複眼的に捕らえられており、物語に厚みが生まれている。語り口自体は洗練されてはいないが、素朴で説得力がある。そして、語り手「私」が登場人物の心理を良い面ばかりではなく悪い面もリアルに描いていくところには、著者ギヤスケル夫人の、母親が子供たちを見つめるような暖かな眼差しが感じられる。

ギヤスケル夫人は急進的なフェミニストではなかった。ギヤスケル夫人が女性の工場労働に反対していることは、ギヤスケル夫人が「男は戦場へ、女は炉辺へ」という男女の性的役割分担に反対していた訳ではないことを示している。例えば、『メアリー・パートン』のエスタは工場へ働きに出ていたことが原因となって売春婦へと転落し、『ベッシーの悩み』(1852)のベッシーは、お金を稼ぎにたった一日家を空けただけで、小奇麗で心地好くあるべき家庭は台無しになり、妹は大火傷を負う。働けるものは皆工場へ駆り出されるようになった工業地帯の労働者家庭の悲惨を、ギヤスケル夫人は知っていたの

であろう。ギヤスケル夫人は『リビー・マーシュの三つの時期』(1847)に見られるように、全ての女性に妻として生きることを望んでいたわけではない。結婚しない生き方も肯定していた。しかし、ギヤスケル夫人は中産階級の結婚生活のあり方に疑問を抱きつつも、家庭の温かさを最も尊いものと考えている点で、大枠において体制と一致している。ギヤスケル夫人は父権社会に正面切って反旗を翻すことはせずに、冷静沈着な観察眼によって結婚制度、社会制度の問題を見抜き、解決策を提唱する。そして、このようなギヤスケル夫人の姿が『異父兄弟』にも伺われる。ギヤスケル夫人は慌てず騒がず「男らしさ」という神話を崩し、男性に人間としての成長を求めている。ギヤスケル夫人もこの短編の主人公同様、「女らしさ」という仮面を付けていたのであって、その仮面の下に強い意思と自己主張を隠していたのではなからうか。『クランフォード』に「女性のほうが男性より優れている」という一節があるが(Cranford, Chap., 2)、これがギヤスケル夫人の本音のように思われてくるのである。

参考文献

Anna Walters ; 'Introduction', *Four Short Stories* (Pandra Press, 1983, London)

Patsy Stoneman ; *Elizabeth Gaskell*(Harvester Press ; 1987, Brighton, Sussex)

Marjory Bald ; *Women Writers of the Nineteenth Century* (Russell & Russell, 1963, New York)

A. B. Hopkins ; *Elizabeth Gaskell, Her Life and Work*(John Lehmann, 1952, London)

Angus Easson ; *Elizabeth Gaskell* (Routledge & Kegan Paul, 1979, London)

John Geoffrey Sharps ; *Mrs. Gaskell's Observation and Invention* (Linden Press, 1970)

Edger Wright ; 'Introduction', *My lady Ludlow and Other Stories* (The World's Classics, Oxford U.P., 1989)